

L・クルチツキの思想と行動

I

ルドヴィク・クルチツキ (Ludwik Kulczycki: 1886-1941) は、一八八〇年代後半から一九〇〇年代初頭にかけてのポーランド王国の労働運動史上において、指導的な役割を演じた一人である。そのクルチツキが、ポーランドの歴史研究、思想史研究においては、不可解なほど、なおざりにされている。⁽¹⁾ 彼が、一九〇五年革命の後に、それまで立脚してきた社会主義を捨てて、政治的にはおよそ対極に位置する陣営に移行したこと、また両大戦間期に、スキヤンダラスな政治生活の幕切れを迎えたことなどが、後世の者をして、彼、および彼の思想から、何らかの胡散臭さを嗅ぎとらしめているのかもしれない。

川 名 隆 史

もちろん、ここで「ある研究上の発見」をもって、このクルチツキを「再評価」することが小論の目的なのではない。クルチツキは、後世にまで影響を及ぼす壮大な思想体系を築いたわけでもないし、クルチツキ崇拜を生むような偉大な業績を残した革命家でもない。そうではなくて、彼が、むしろある意味でのエクレクティクであり、またオボルチュニストであったことが、逆にわれわれの興味をひくのである。

一九世紀末のポーランド王国において、政治・社会変革を目指す急進的インテリゲンツィアの課題は、成長しつつある労働運動や民族運動に、解放の理念と、その戦略、戦術を提示することにあった。クルチツキも、その課題を背負った一人であり、彼の提示した思想および解

放の戦略は、一時期、相当の影響力を有した。彼の特徴は、理想、つまり究極目標に固執することなく、ひたすら政治的現実主義の道を歩んだ点にある。彼は、折々の政治的環境を顧慮しつつ、より可能なもの、新たな展望を開きうるものには鋭敏な嗅覚を持ち、それらを、独特の無節操さで自分の思想に取り込んだ。こうした彼の性向が、英雄主義・理想主義者の資質を要求される、運動の指導者として名を残す可能性を、彼から奪ったのかもしれない。しかし、それはクルチツキに限ったことではなく、殉教ばかりが革命家の倫理ではない。ともかく、ここでは、彼の思想が、一定の振幅を伴いながらも、当該時期の急進的インテリゲンツィアの思想世界を支配した二つの潮流——社会主義と愛国主義⁽³⁾——の接点に位置し、また彼自身、中心線上を歩み続けようと努めたということが重要なのである。

(1) クルチツキ個人に関する研究はほとんどなく、労働運動史や党史の面から間接的に触れたものを除くと、挙げるべきものは Wic の論文しかない。W. Wic, *Problematyka narodowa w poglądach Ludwika Kulczyńskiego* (1887—1900), w: *Polska myśl polityczna XIX i XX wieku*, Tom V, Wrocław itd. 1983, s. 7—63.

(2) por. Wic. *op. cit.*, s. 8; *Polski słownik biograficzny*, t. XVI, z. 1, s. 131—132.

(3) 後出の「国際主義」と同じく、ポーランド史における特殊な用語として用いる。その意味合いについては、とりあえず、拙稿「労働運動と民族問題」『一橋論叢』第九三巻第六号（一九八五年六月）（以下、拙稿Ⅰ）を参照。

II

クルチツキが政治史上に姿を現すのは、一八八〇年代中葉のことである。当時のポーランド王国社会では、一月蜂起（一八六三—六四）敗北後の政治的アバシーの影が次第に薄れ、あらゆる意味で、活性化、流動化の兆しを感じられていた。政治的アバシーの時代を嚮導してきたワルシャワ・ポジティヴィズム⁽¹⁾に、まずはその鬼子である社会主義が、階級社会論に立脚した社会革命論を唱え、続いて愛国主義が、過去の蜂起の伝統の復活と独立闘争の再開を叫んで、戦いを挑んだのである。政治史上の事象で表現すれば、一八八二年の「プロレタリアート党⁽²⁾」の結成と、一八八七年の「ポーランド連盟⁽³⁾」の結成とが、転換を示す事件であった。

ポジティヴィズムは、分割支配下で、当時の意味での

近代化の推進を自らのテーゼとした。しかし、その近代化の進展の結果生じた種々の社会問題、それに幅広い社会層の精神的覚醒——これこそポジティヴィズムの目指したものであったが——、とりわけ民族抑圧への、ある種の根源的な反発の意識の形成にたいして、ポジティヴィズムは、有効に対処しえず、逆に保守化する傾向を見せた。

こうした状況を打破したいという欲求が、インテリゲンツィアの、特に若い世代をとらえたのである。彼らは、様々の色彩の思想を本国に向けて発信する亡命者集団の活動と連動して、本国内に政治的急進主義の思潮を——数的に微少であり、その影響圏も局限されてはいたが——確実に醸成させていった。彼らの政治・社会変革への意志は、一方では、壊滅したばかりのプロレタリアート党が残した社会主義思想と行動主義に、また他方では、復活の兆しを見せる愛国主義の思潮と結びついた。

一八八〇年代中葉の、この若いインテリゲンツィアの思想傾向は混乱していた。プロレタリアート党の社会革命論は、民族問題への顧慮を欠き、愛国主義は、現実の社会問題に対処する術を知らなかった。これが、彼らの

思想形成の過程に混乱を生じさせたのである。しかし、総じて問題は、民族解放——その具体的な実現の形式については、ここでは問わない——と社会の下層——特に労働者と農民——の解放ないしは地位向上という、二つの課題に向けられていた。そこでの、重点の置き方の差異が、そのまま彼らの思想の差異となって現れたのである。

急進的インテリゲンツィアの、この思想上の混乱は、一八九〇年代半ば近くには、おおよそ、以下の三方向に整序されることで解消された。便宜上、図式的な形容句を用いると、それは、(一)社会主義色を払拭しつつある、愛国主義派の「民族連盟」⁽⁴⁾、(二)古典的な愛国主義の理念、戦術を継承しつつ、一応は社会主義の立場をとる「ポーランド社会党」(PPS)⁽⁵⁾、(三)ポーランド独立要求を否定し、国際主義の立場をとる「ポーランド王国社会民主党」(SDKP)⁽⁶⁾である。このうち、とりわけ PPS に思想上の雑色性が認められる。主導権を握る右派の一部は、民族連盟と渾然一体をなし、左派は、現実の運動面では SDKP との区別が曖昧であった。クルチツキは、この図式の、(一)と(三)の接点に位置した。

- (1) (pozytywizm warszawski) 拙稿Ⅰ、三一五頁を参照。
- (2) (Międzynarodowa Socjalno-Rewolucyjna Partia Proletariat) 拙稿Ⅰ、七一〇頁を参照。
- (3) (Liga Polska) 拙稿Ⅰ、一三一—一四頁を参照。
- (4) (Liga Narodowa) ポーランド連盟の内部クーデターにより、一八九三年四月に結成された民族主義組織。一八九七年に合法組織「民族民主党」(Stronnictwo Narodowo-Demokratyczne: エンデツィア)を創設。一九〇三年に親ロシア路線に転換した。
- (5) (Polska Partia Socjalistyczna) 名目上は一八九二年一月に、実質的には一八九三年秋に結成。
- (6) (Socialdemokracja Królestwa Polskiego) 一八九三年七月に結成。PPS も含めて、結成の経緯については、拙稿「ポーランド王国の労働運動における二つの潮流の形成について」『一橋研究』第八巻第一号(一九八三年四月)以下、拙稿Ⅱを参照。
- (7) 本国の左派は、当初から、これを批判していた。左派が優勢となった第三回大会(一八九五年六月)で、PPS は、民族連盟との断絶を決議した。*Materiały do historii PPS i ruchu rewolucyjnego w zaborze rosyjskim od r. 1893—1904, tom I, Warszawa 1907, s. 148.* しかし、この決議は、規約上は PPS と別組織であって、しかも右派の牙城である国外組織(ZZSP)のメンバーを拘束できなく、PPS = ZZSP と民族連盟との間に、党帰属に関して明確な境界線

ができたのは、一八九六年頃である。por. J. Kanciewicz, *Polska Partia Socjalistyczna w latach 1892—1896, Warszawa 1984, s. 449.*

III

ワルシャワの「クロネンベルク商業学校」は、王国で、ロシア化を免れた、ほとんど唯一の高等教育機関であった。クルチツキが入学した一八八四—一八五年頃、この学校では、幾つかの秘密学生サークルが活動していた。⁽¹⁾ 思想傾向は様々であったが、これらのサークルは、まもなく、王国の社会主義運動や愛国主義運動に、多くの活動家を提供する源泉となる。クルチツキは、なかでも最も社会主義的色彩の強いサークルに属し、まもなくその中心人物となる。一八八六年には、彼のサークルは、ワルシャワの労働者、手工業者のサークルとも関係を持ち、秘密の教宣活動に従事した。⁽²⁾ ただし、この時点ではまだ、労働運動そのものに介入した形跡はない。

折しも王国では、ポジティヴィズムからの脱却を叫ぶ急進的リベラリズムのジャーナリズムの発生と連動して、社会主義と愛国主義を未分化のまま内包した「ポーラン

「青年同盟」(Net)⁽⁴⁾が結成された。Netは、とりわけ急進的學生を対象に、急速に組織網を広げていた。クルチツキ自身は、まだNetに加入してはいないが、その波は近くまで押し寄せていた。この時期のクルチツキのサークルは、彼自身を含めて「民族問題(つまりポーランド独立の要求——T. K.)に強い関心を示す者」と、プロレタリアート党流の「コスモポリタン」とから成っていたといふ⁽⁵⁾。

一八八七年初秋、クルチツキは、自己の勉学のためと、亡命者との接触のために、ジュネーヴへ向かった。勉学の方は、まもなく放棄し、彼は専ら、種々の傾向のポーランド人、ロシア人亡命者との接触到に明け暮れる⁽⁶⁾。結局、彼は、メンデルソン(S. Mendelson)やデンプスキ(A. Dębski)等、プロレタリアート党の亡命殘党に組し、またブレハノフ等とも接触しながら、後の自分の行動を律する基礎を作りあげていった⁽⁷⁾。だが奇妙なことに、彼はその一方で、Netの創設者バリツキ(Z. Bałucki)とも親交を結び、事実上、ポーランド連盟の下部組織となつたNetにも加入している⁽⁸⁾。革命家を志す若いインテリゲンツィアが、精緻な革命論、社会理論を求めながら、そ

の一方で、ロマン主義の形而上学にも、ある憧れを抱き続ける。この矛盾した姿こそ、ある意味では、この時期の急進的インテリゲンツィアの心情を、適確に映し出しているといえるかもしれない。

クルチツキは、プロレタリアート党再建の方向で、亡命者との協議に入る。彼は、そのさい、亡命者に、無償の文書提供、民族問題への顧慮、憲法・自治を内容とする最小限綱領の採用を要求した⁽⁹⁾。最小限綱領の意義を否定し、「社会革命」という最大限綱領のみを掲げて、プロレタリアート党の活動を支えてきた亡命者は、このとき、あっさりクルチツキの要求を受け入れた⁽¹⁰⁾。本国に再び、手足となる組織が生まれるという希望が、亡命者をして、妥協に進ませたのかもしれない。

ともかく、この譲歩によって力を得たクルチツキは、一転、Netを脱退し、一八八八年一月の半ばに、大量の文書を携えて、ガリツィア経由でワルシャワに戻った⁽¹¹⁾。その頃、ワルシャワには、すでにカスプシヤク(M. Kasprzak)がボズナニから来ており、独自の労働者組織活動を進めていた。一八八八年二月から三月にかけて、このカスプシヤクのグループと、クロネンベルク商業学校

の学生グループ (Kronenbercyzy) とが合体して、「第二次プロレタリアート党」が結成された。⁽²⁾

- (1) M. Mazowiecki (L. Kulczycki), *Historia ruchu socjalistycznego w zaborze rosyjskim*, Kraków 1903, s. 126—127; J. Borejsza, *Powstanie II Proletariatu i początki jego działalności*, "Z pola walki", 1938 nr 2, s. 34.
- (2) Mazowiecki, *op. cit.*, s. 127.
- (3) 一八八六年にワルシャワで発刊された『声』(Głos)のその傾向については、拙稿「一三一—一四頁を参照」。
- (4) (Związek Młodzieży Polskiej) 一八八六年に結成。一八八七年からポーランド連盟に結びつく。
- (5) Mazowiecki, *op. cit.*, s. 126.
- (6) L. Kulczycki, *Dokoła mego życia*, (Dział Rękopisów Biblioteki Narodowej w Warszawie. sygn. IV 6384), s. 149—177.
- (7) *tamże*, s. 162—163.
- (8) *tamże*, s. 169.
- (9) *tamże*, s. 158—159; por. także Borejsza, *op. cit.*, s. 35.
- (10) *tamże*, s. 159.
- (11) *tamże*, s. 179, 180—184; *Ze wspomnień Ludwika Kułczyńskiego*, "Z pola walki", 1972 nr 1, s. 161, 162—165.
- (12) por. Borejsza, *op. cit.*, s. 37—39.

IV

第二次プロレタリアート党は、党活動を進める過程で、幾つかのパンフレットを発行した。ポーランド連盟の領袖ミコフスキ (Z. Mikowski—T. T. Jez) を批判した、クルツキのパンフレット⁽¹⁾も、その一環である。彼は、ここで初めて、自己の思想を体系的に公表した。彼はそのなかで、ポーランド連盟の愛国主義を、(一) ポーランド独立要求の不明確さ(民族的境界か、歴史的境界か?)、(二) 社会的綱領の欠如(現存社会における階級対立への視点の欠如)について批判した。⁽²⁾彼は更に、「愛国主義的感情は、民族的一体性が見い出されるところ……言いかえると、民族が、法的、経済的にみて、ひとつの階級をなしているところのみ、本格的な政治闘争のうちに出現しうるものだ」と述べている。プロレタリアート党が結成される直前の、一八八〇年代初頭に、ポーランド人社会主義者の間で、独立要求の是非の問題とも関連して、運動の原動力、いやむしろ革命理論そのものの基礎を、「民族」とみるか、あるいは「階級」(プロレタリアート)とみるかという対立が存在し、その二

者扱一が、後の社会主義者のあり方を決定したという経緯があった。クルチツキがここで用いた論理は、明らかに後者の側、すなわちプロレタリアート党の論理の枠内にある。

独立要求については、彼は、その倫理的正当性を認めつつも、そのための戦略も戦術も提示しない。彼にとつて、近い将来に実現する見込みのあるもののみが、綱領たるべきであった。したがって、彼は、独立の達成を最小限綱領とし、社会主義を最大限綱領とする、リマノフスキ(B. Limanowski)派の社会主義者の路線——これが後に PPS に継承される——とは、少なくともこの時点では、理論的に無縁であった。

こうして、最小限綱領として提示された「ロシア帝国の民主的憲法とポーランド王国の自治」とが、最も重要な意味を持つことになる。プロレタリアート党は、当時のポーランド社会に存在する抑圧を、政治的(民族的)抑圧と、経済的(階級的)抑圧に区分けし、前者を後者の一部分と規定した。前者の抑圧の解消——ポーランドの独立——は、部分的解放にすぎないとして、その意義を否定され、後者の解放——社会主義の実現——が、一

面的に主張された⁽⁵⁾。クルチツキも、抑圧の区分けについては、プロレタリアート党の仕方を踏襲したが、解放の戦略は、まったく異っている。彼は、政治的(民族的)抑圧からの解放を、現実唯一可能な要求、全面的解放のための不可欠の前段階として重視し、それを最小限綱領として提示した。「政治的グループの自治、それも完全な自治は、あらゆる政治的抑圧を、したがって民族的抑圧をも除去する。……人種的独自性を有する、ある人間集団、いわゆる民族の発展のためには、自治の権利を有することができれば、それで申し分ない⁽⁶⁾。」「政治的グループ」という語ををどう解釈するかはさておいても、クルチツキにおいては、自治、独立、社会主義の相互関係、特に自治は独立の前段階なのか、社会主義の前段階なのか、また独立は社会主義の必須の前段階なのかという、発展の連鎖についての見解が、いまひとつ明確でない。結局、彼は、最後まで、この点を明らかにしなかった、というよりは、できなかったのかもしれない。ともかく、彼は、自治を唱え、その実現のための戦略を、ロシアの社会主義者との共闘(国際主義)にもとづかせ、戦術を、絶対主義の条件下では、唯一有効な手段である

政治的テロと規定したのである。⁽⁸⁾

このパンフレットで表明された見解は、おおよそ、以後一〇数年間、持続された。ここでは触れられていないが、もうひとつ問題とすべきことは、彼の対ポジティヴィズム観である。これに関して、クルチツキは、一八八〇年代には何も、そして後にも多くは語っていない。その数少ない言明から類推する限りでは、彼は、ポジティヴィズムの社会有機体論や「有機的労働」(Praca organiczna) 論を、政治的観点からは批判しつつも、それがポーランド人の精神文化の向上に果たした功績はきわめて大きいと評価している。⁽¹⁰⁾ しかも、クルチツキが、最小限綱領の正当性を論じるさいに用いた論法は、明らかに、現実の状況を見て、可能なものを選択するポジティヴィズムの論法である。彼が提示した最小限綱領が、その内実において、当時の急進的リベラリズム——これもポジティヴィズムの子である——の要求と類似していたことは、むしろ必然だったというべきかもしれない。クルチツキにとって、ポジティヴィズムとは、インテリゲンツィアを厳密科学へ誘い、現実主義的な思考様式を確立させ、また社会の要請に現実的な仕方で適合する道徳、他

愛的(altruistyczny)なエティカを生み出した点で、むしろ積極的に評価されるべきものだった。⁽¹¹⁾ 彼によれば、この社会的エティカを共有する革命家は、すべてポジティヴィストであり、⁽¹²⁾ 彼自身も、とうぜんその一人である。クルチツキのパンフレットと時を同じくして、メンデルソンの手になる、党のワルシャワ委員会のピラが、国外から持ち込まれ、撒かれた。前年の協議にしたがい、メンデルソンはここで、プロレタリアート党として初めて、最小限綱領としての「自治」の要求を表明した。⁽¹³⁾ しかし、メルデルソンがこの文書で用いた「自治」と、クルチツキが前述のパンフレットで用いた「自治」は、はっきりと意味合いを異にしている。メンデルソンは、全体としては、プロレタリアート党時代の見解に依拠しており、「自治」は、事実上、社会主義社会に到る過渡的形態、つまり「プロレタリアート独裁」に言い換えられていた。⁽¹⁴⁾ クルチツキは、一八八八年夏に、要人暗殺を企てたことがもとで、ワルシャワ退去を余儀なくされ、バリへ向かった。⁽¹⁵⁾ このとき、彼が、最小限綱領に関する齟齬を調整する意図を持っていたのか、またバリで、この点でメンデルソンとどんな話し合いをしたのかは明ら

かでない⁽¹⁶⁾。ともかく、メンデルソンは、翌一八八九年にも同じような趣旨の論文を、機関誌に載せている⁽¹⁷⁾。

こうした経緯は、当時用いられた「自治」(samorząd)という語が、一九〇〇年代初頭になって、明確に地域的自治を示す語 (autonomia) が用いられるようになるまで、当事者間に共通の理解のない、解釈の一定しない言葉であったことからの帰結である。ただ少なくとも、本国の、クルチツキを中心とするグループには、それが後者、つまり「autonomia」の意味としての「自治」であるという了解が、確かに存在した⁽¹⁸⁾。

- (1) [L. Kulczycki], *Z powodu broszury "Rzecz o obronie czynnej i o Skarbie Narodowym"*, [Warszawa] 1888.
- (2) Mazowiecki, *op. cit.*, s. 130-131.
- (3) [Kulczycki], *Z powodu.....*, s. 6-7, cyt. w: Wic, *op. cit.*, s. 15.
- (4) 拙稿Ⅰ、一〇頁、および拙稿Ⅱ、五〇頁を参照。
- (5) 拙稿Ⅰ、八一〇頁、および拙稿Ⅱ、四六一四七頁を参照。
- (6) [Kulczycki], *Z powodu.....*, s. 16, cyt. w: Wic, *op. cit.*, s. 16.
- (7) 他の二つの分割領についても、彼は、同様の戦略を提示する。その場合の共闘の対象は、とうぜんドイツおよび

オーストリアの社会主義者である。por. *tamże*, s. 16, cyt. w: Wic, *op. cit.*, s. 16.

(8) *tamże*, s. 11, cyt. w: Wic, *op. cit.*, s. 17.

(9) L. Kulczycki, *Zarys podstaw socjologii ogólnej*, Lwów 1900, s. 24-30; Mazowiecki, *op. cit.*, s. 16.

(10) Kulczycki, *Doświadczenia mego życia*, s. 24-26; Mazowiecki, *op. cit.*, s. 16.

(11) L. Kulczycki, *Współczesne prądy umysłowe i polityczne*, seria I. Kraków 1903, s. 11-12.

(12) *tamże*, s. 11.

(13) F. Perl (Res), *Życie ruchu socjalistycznego w zaborze rosyjskim*, Warszawa 1958 (wyd. 1: 1910), s. 311-312.

(14) *tamże*, s. 312.

(15) 八月にスタントホルムで、亡命者との会合が開かれる予定になっていた。クルチツキは、リガ経由でスタントホルム入りを試みたが、果たせず、そのまぎんに向かった。

(16) この時の入り滞にについて、クルチツキは「メンデルソンがフランスに魅せられていたこと、本国でテロ活動を推進すること、で合意したことしか書き残していない。por. Kulczycki, *Doświadczenia mego życia*, s. 196-197, 201-204; *Ze wspomnień Ludwika Kulczyckiego*, s. 174-175, 178-181.

(17) Perl, *op. cit.*, s. 255-256.

(18) Mazowiecki, *op. cit.*, s. 175.

V

一八八八年一〇月に本国に戻ったクルチツキは、一二月末に逮捕された。そして、彼が獄中にあった間に、ポーランド王国の社会主義運動、愛国主義運動には、大きな変化が生じた。前述のように、二つの社会主義党が生まれ、愛国主義勢力が再編されたのである。クルチツキは、一八九三年六月に釈放され、翌年、PPSに入党する。

成立当初のPPSは、それまで存在した労働者組織の大部分がSDKPを結成したため、インテリゲンツィア中心の党であった。労働者組織を提供したのは、唯一、ワルシャワのストロジエツキ(J. Strojczycki)のグループであった。党の主導権を握ったのは、国外の「在外ポーランド社会主義者同盟」(ZZSP)⁽¹⁾と、ピウスツキ(J. Pilsudski)等のヴィルノ・グループのインテリゲンツィアであり、彼らが右派を形成した。ストロジエツキのグループを中心とする、数的には最大のワルシャワ組織は、左派を形成した。右派の主だったメンバーは、Zetや民族連盟に近く、逆にストロジエツキのグループは、

SDKPと緊密な関係にあった。右派の牙城で、党の理論センターであるZZSPは、ポーランド独立を最小限綱領として強調する論調を持続した。運動の方針をめぐる、インテリゲンツィアと労働者の意識の差は大きく、本国の左派の反発は必至であった。

クルチツキは、ストロジエツキ逮捕後のワルシャワ組織を率い、右派指導部に対抗する。彼は、一八九四年半ばに、「綱領問題」と題する論稿を、ZZSPの機関誌『曙光』(Przedświt)に送った。その中で、彼は、独立要求そのものは社会主義の達成に有利だとして認めるものの、その実現の条件を問題視する。⁽³⁾ZZSPは、一八八〇年代後半にポーランド連盟が提示した戦略に固執していた。つまり、分割国同士の戦争、あるいはロシアの内部破綻を機に民族蜂起を起こし、分離独立を達成するという戦略である。この戦略を「有害な夢想」⁽⁴⁾と非難したクルチツキは、国際主義の立場から、ロシアの革命勢力との共闘にもとづく、ロシア帝国の民主化、憲法の獲得を最至近の課題とし、それを独立に到る必然の移行段階と位置づけた。そして、それをPPSの綱領に加えよと要求したのである。⁽⁵⁾

『曙光』編集部は、クルチツキの論稿を掲載せず、逆に「諸段階」という題の連続論文を発表して、クルチツキを代表とする左派に対抗する姿勢を示した。⁽⁶⁾クルチツキは、機関誌上での論争をあきらめ、問題を党大会の場に移そうと企てた。⁽⁷⁾それを察知した右派指導部と左派との間で、事前工作競争が始まるのである。結局、その過程で、クルチツキと、もうひとりの左派の領袖ピエトキエヴィチ (K. Pietkiewicz) は、ピウスツキ等の軟化工作に屈した。彼らは、憲法要求の条項を含んだ新綱領の作成、あるいは現綱領の改訂は求めず、PPS が憲法要求を支持するとの言明を、PPS の機関誌『労働者』(Robotnik) に掲載するという線で妥協した。⁽⁸⁾

PPS 第三回大会は、この事前工作のため、予定より半年も遅れて、一八九五年六月末にヴィルノで開かれた。大会は、クルチツキを、右派のピウスツキ、ヴォイチエフスキ (S. Wojciechowski) とともに中央委員会 (CKR) に選出し、憲法要求の問題では、事前工作通りに決議した。⁽⁹⁾憲法要求についての言明は、『労働者』九号 (一八九五年八月二五日) で、ピウスツキによってなされた。ところが、その内容は、クルチツキ等の期待と

は、およそかけ離れたものであった。そこには、「われわれは、立憲化には好意的に対応するし、ロシア人がこの方向で努力するのを支持もしうる。だが、われわれとしては、そんな中途半端な自由を、われわれの政策のスローガンとするわけにはいかない」、「ポーランドとロシアの社会の内部を厳密に分析すれば、結論は、独立ポーランド共和国しかない」と書かれている。ピウスツキの独断専行にたいして、クルチツキが何らかの抗議をしたであろうことは予想されるが、その詳細は明らかでない。まもなく、クルチツキは逮捕され、二年間の投獄の後、シベリア流刑に処せられてしまったのである。右派のみの構成となった CKR が、第三回大会の決議を有名無実化してしまったことはいうまでもない。

(1) (Związek Zagranicznych Socjalistów Polskich) 一八九二年一月にバリで開かれた、亡命者を中心とする会議で、本国の運動の統一と指導のための組織として結成された。PPS の創設も、このときに決定された。結成の経緯については、拙稿Ⅱ、五三―五四を参照。

(2) 一八九三年六月に、自称「PPS 第一回大会」を開いたグループで、ほぼ全員が PPS に属していた。彼らが、PPS の最高指導部 CKR を掌握し続けたのである。

- (3) Wic, *op. cit.*, s. 20.
- (4) Mazowiecki, *op. cit.*, s. 292.
- (5) Wic, *op. cit.*, s. 20.
- (6) Mazowiecki, *op. cit.*, s. 292—309.
- (7) Wic, *op. cit.*, s. 23.
- (8) Kanciewicz, *op. cit.*, s. 306.
- (9) *Materialy do historii PPS*……, s. 146.
- (10) [J. Piłsudski], *Nasze hasła*, cyt. w: Kanciewicz, *op. cit.*, s. 307.

VI

一八九九年八月にシベリアを脱走したクルチツキは、オーストリア領のルヴフに居を定め、ZZSP のルヴフ支部に加入した。当初は、ロンドンの ZZSP 指導部との関係も良好で、PPS 指導部への復帰の可能性も生じた⁽¹⁾。これまで公式には PPS と別個の組織であった ZZSP は、一八九九年一二月の第六回大会で、規約を改正し、「PPS 在外部」となって、PPS に下属することとなった⁽²⁾。これを受けて、CKR は、在外部の指揮のための「国外委員会」(KZ) を創設し、クルチツキも、そのメンバーに選出された。しかし、この頃から、クルチツキは、以前

の主張を繰り返すようになり、指導部との関係も陰悪化し始める。彼は、PPS の蜂起戦略を批判した「テロリズム」と題する論稿を、『曙光』に送ったが、またも掲載を拒否された⁽³⁾。これを機に、クルチツキは、こんどはルヴフ支部を拠点にして、指導部批判を開始したのである。

このとき、PPS は、結党以来、最大の危機に見舞われていた。一九〇〇年二月に、ウッチの『労働者』の印刷所が発覚し、三名の CKR のメンバーのうち、ピウスツキとマリノフスキ (A. Malinowski) が逮捕され、本国組織は、いわば頭を失った状態となってしまった。ロンドンの KZ 本部は、パニックを避けるため、一部の KZ のメンバーにさえ、この事件をひた隠しにした⁽⁴⁾。もなく、幾つかの支部がこの行為に抗議したが、最も強硬だったのが、クルチツキの率いるルヴフ支部であった。これにたいして、ロンドンの本部は、党規律を持ち出し、除名もほのめかすような強圧的な態度をとり続けた。このため、ルヴフ支部は、一九〇〇年五月中旬に、先手を打って、PPS からの脱退を通告してしまう⁽⁵⁾。その後、同じ反対派のバリ支部やチューリヒ支部が、ルヴフ支部

と本部との仲介に動いたが、双方とも譲る気配はなかった。結局、ルヴフ支部は、五月下旬に「PPS—プロレタリアート」、または「第三次プロレタリアート党」を名乗って、正式に分離してしまう⁽⁶⁾。そして、ウッチとワルシャワで、とりわけ、以前の左派グループの再組織化に乗り出した。

実質上の党首であるクルチツキは、PPS—プロレタリアートを、ポーランド王国の労働運動の中で、PPSと「ポーランド王国・リトアニア社会民主党」⁽⁷⁾(SDKPiL)の中間に立たせ、いわば「第三勢力」として、運動の主導権を握ろうと考えた⁽⁸⁾。しかし、経験ある有能なオルガナイザーを欠き、また政治闘争偏重に傾いて、労働運動の日常闘争のための、有効かつ独自の理論を欠いたPPS—プロレタリアートは、ポーランド人の労働運動において、二大勢力を築きつつあったPPSとSDKPiLの後塵を拝するに留まらざるをえなかった。おそらくは小党の無力さにさいなまれたであろうがゆえに、クルチツキは、綱領的にも近く、実際の運動でも協力関係にあった⁽⁹⁾SDKPiLに合同を持ちかけ、交渉を行った。しかし、それも、テロ行使の是非をめぐる対立から、不首尾に終

わってしまった⁽¹⁰⁾。

PPS—プロレタリアートは、一九〇五年革命勃発後、クルチツキの思想の変化を反映して、次第にリベラリズムに接近していく。そして、第二ドゥーマ選挙では、リベラル・インテリゲンツィアの党「進歩民主同盟」⁽¹¹⁾と選挙ブロックを形成し、選挙に参加した。だが、革命の退潮と反動の攻勢の中で、党勢は衰え、党は、一九〇七年には事実上、解体してしまう。残存党員の大部分はSDKPiLに移行し、クルチツキ自身は、次第に社会主義運動から遠ざかっていった⁽¹²⁾。

(1) J. Targalski, *Geneza Polskiej Partii Socjalistycznej Proletariat, "Z pola walki"*, 1973 nr 2/3, s. 67.

(2) *Materiały do historii PPS*……, tom II, Warszawa 1911, s. 71; Mazowiecki, *op. cit.*, s. 373—374.

(3) Były Proletariatczyk [L. Kulczycki], *Terroryzm*, zob. Targalski, *op. cit.*, s. 70—72.

(4) Mazowiecki, *op. cit.*, s. 376—377; Targalski, *op. cit.*, s. 72.

(5) Targalski, *op. cit.*, s. 73.

(6) *Wic, op. cit.*, s. 29—31.

(7) SDKP は、一八九五年に壊滅し、一九〇〇年にリトアニアの組織を加えて再建された。

- (8) Wic, *op. cit.*, s. 62.
- (9) SDKPIL の民族理論については、拙稿『ポーランド王国リトマニア社会民主党』の民族理論形成史上の一局面 (1899—1901)』『東欧史研究』第八号 (一九八四年一〇月) を参照。
- (10) G. W. Strobel, *Die Partei Rosa Luxemburgs, Lenin und die SPD*, Wiesbaden 1974, S. 137.
- (11) (Związek Postępowo-Demokratyczny) 一九〇四年に結成。ロシア帝国の民主化、ポーランド王国の自治等を内容とする綱領は、PPS—プロレタリアートのそれと、きわめて似通っている。理論的にも、また人的にも、この党はワルシャワ・ボジテヴィズムの正嫡であった。この党と結びつくこと自体が、クルチツキの思想的源泉のありかを示しているといえよう。
- (12) *Sprawozdanie z działalności Polskiej Partii Socjalistycznej Proletariat (od połowy 1900 do początku 1908 r.)*, b. m. 1908, s. 138; T. Stegner, "Postępowa Demokracja" a inteligencja, w: *Inteligencja polska w XIX i XX wieku*, studia 4, Warszawa 1985, s. 279.
- (13) Strobel, *op. cit.*, S. 137; Wic, *op. cit.*, s. 8.

VII

クルチツキの生涯において、PPS—プロレタリアート

とともにあった約七年間は、彼がもっとも活発に文筆活動を展開した時期である。この間、彼は、PPS—プロレタリアートの政治指針に関する文書を発行し、機関誌『プロレタリアート』(Proletariat) の実質上の主筆となるとともに、王国の革命運動史や同時代の諸思想に関する叙述と、学生時代から手がけた社会学の研究を通じて、独自の社会変革の理論を完成させようとした。⁽¹⁾

PPS—プロレタリアートの最初の綱領には、テロを手段として、ロシア帝国に、ポーランド王国の自治を内に含んだ民主的憲法を実現させるという、クルチツキの以前からの構想が、ほぼそのまま取り入れられている。⁽²⁾とはいえ、クルチツキは、いつまでも同じ観点に固執はしない。彼は、周囲の議論や政治状況を眺めながら、ある点では強調の対象を変化させ、またある点では、新たに仕入れた観点を我がものとしていった。これは、クルチツキに特有の政治的現実主義のなせる技であり、また彼独特のオボルチュニズムの発露でもあったろう。そして、それが典型的に現れたのが、テロの問題、および憲法・自治の問題、すなわち民族問題においてであった。

PPS と袂を分かった直後のクルチツキは、テロを擁

護する幾つかのパンレットを發行し、PPS にたいしては、その蜂起路線を「SDKPIL にたがしては、その大衆運動論を批判した。⁽³⁾彼は、テロに、(一)弾圧にたいする防衛の意義、(二)政府に譲歩を迫る攻勢の意義、(三)革命的気運を醸成させる意義、(四)抑圧への反発という倫理的な意義を付与した。そして、政治的自由のないロシアでは、大衆的示威行動には効果がなく、テロこそ、唯一可能で有効な政治闘争の型式であるとした。⁽⁴⁾

ところが、このテロ擁護の論調は——機関誌『プロレタリアート』から筆者が確認しえた限りでは——一九〇三年を境に、次第に消え、それに代って、憲法・自治の要求に関連して、以前は否定的だった大衆運動論を肯定するような論調が支配的となってくる。⁽⁵⁾運動論において、大衆的示威を基本戦術とする SDKPIL の成長と、それに近い観点に立つ PPS 内の左派の強化、ロシアの社会民主党の再編に伴う、ロシアの運動の見通しに関する変化、それに SDKPIL との合同のための配慮などが、その理由と考えられるが、もちろん仮説の域を出ない。

テロの問題とは逆に、憲法・自治論は、その内容が徐々に細密化された。特に、一九〇五年革命勃発後は、立

憲法の希望とともに、「連邦制」(federacia)、「自決権」、「民族的文化的自治」といった、雑多なスローガンが、クルチツキの、そしてまた PPS—プロレタリアートの民族理論を飾り立てることになる。⁽⁷⁾「ポーランド王国の自治」を出発点としたクルチツキの民族理論は、常にポーランド独立を理想型式として措定しながらも、複合民族国家の存在の是認、そしてここに至り、ロシア帝国の「自治・連邦国家」化の計画作成にまで進展したのである。ここでは、彼の計画の内容にまで立ち入るつもりはない。彼の提示した帝国改造計画は、革命が進展する過程で、雨後の筍のごとくに出現した、あまたの「計画」のうちのひとつにすぎないし、また彼の計画が、その中で際立って現実的なものだったというわけでもない。問題は、その内容ではなく、彼の理論の変化、思想の変化である。

一八八〇年代にクルチツキが提示した自治構想は、社会主義者の最小限綱領、それも、実現可能性の点でひとまず否定された独立の代替物として、民族抑圧の解消をもたらす手段であった。つまり、自治は、様々の点でひとつの理想型式といえる独立、そしてその後の社会主義

による普遍的解放へと到る一段階と考えられていた。しかし、一九〇五年革命の渦中に書かれたものから読みとれるのは、もはや自己目的化した自治論しかない。議論が精緻になればなるほど、クルチツキは、そこにのめりこんでいった。PPS—プロレタリアートという社会主義党の指導者である限りにおいて、彼は、それなりの社会主義的言辭を自らの議論の中に織り込んでゐる。しかし、その意味は、徐々に稀薄になり、独立に関する言辭さえ、いつしか影をひそめた。彼の主な批判は、SDKPiLやPPS左派の革命主義、PPS右派のバンディティズムに向けられた⁽⁸⁾。

政治活動において進歩民主同盟と結び、自治を問題にする限りにおいて民族民主黨をさえ擁護するクルチツキの姿は、もはや社会主義者・革命家の姿でなく、「現実政治」の世界に生きる政治家のそれである。革命後の反動攻勢の時代を経て、第一次大戦が勃発したとき、クルチツキは、こんどは、親同盟國陣営の論客として姿を現す。彼の「現実主義」という名のオボルチュニズムは、このとき最大限に発揮されたのである。

(1) Mazowiecki, *op. cit.*; *Współczesne prądy umysłowe i*

polityczne, seria I, Kraków 1903; seria II, Lwów 1904; *Zarys podstaw socjologii ogólnej, op. cit.*

(2) [L. Kulczycki], *Uwagi w sprawie taktyki socjalistów polskich w zaborze rosyjskim*, b. m. [1900] 及び 実質上の党綱領であった。por. *Sprawozdanie z działalności PPS-Proletariat*……, s. 3.

(3) [L. Kulczycki], *W sprawie powstania i innych zagadnień programowo-taktycznych*, b. m. 1901, s. 23—30, 46—61.

(4) [Kulczycki], *W sprawie taktyki*……, s. 14—19.

(5) 強々調子でハロを擁護した最後の666が、*Dwa zamachy*, "Proletariat" nr 7/8 (III/IV 1902), s. 28—30 以下。

(6) 革命後の反動攻勢の時期になると、再びテロが叫ばれ始める。Sprawozdanie z działalności PPS-Proletariat……, s. 117—121.

(7) L. Kulczycki, *Autonomia i federalizm w ustroju państwa konstytucyjnych*, Lwów 1906; M. Warczyński [L. Kulczycki], *Antyfederalizm SDKPiL i federalizm PPS*, b. m. 1906; M. Mazowiecki [L. Kulczycki], *Federalizm a polityka socjalistyczna*, Kraków 1907; *Program Polskiej Partii Socjalistycznej Proletariatu* (1906), w: *Sprawozdanie z działalności PPS-Proletariat*……, s. 81—94.

(8) Warczyński, *op. cit.*, s. 16—22.

(9) 民族民主党も、クルチツキと似た論拠(独立の可能性の問題)から、一九〇三年に自治路線に転換した。zob. *Dokumenty do historii Ligi Narodowej*, "Niepodległość", tom X (1934), s. 131—132.

VIII

自らを社会主義者と自覚していた限り、クルチツキは、憲法や自治という、ロシア帝国の民主化の政治綱領を、社会主義者の最小限綱領として提示した。そして、その正当性を主張するために、彼は、最小限綱領への視点を欠いたプロレタリアート党の革命論を、また、政治的変革への意志を欠いた経済主義ないしは合法マルクス主義の潮流を、それに、ポーランド独立を少なくとも綱領においては最小限綱領として掲げる PPS を批判した。彼の理論の核心は、現実の諸条件の中で実現可能なものの選択と提示、その実現のための主体的行動であった。しかし、目標設定において観念論を排し、ひたすら現実主義的たらしめたクルチツキは、やがて、現実政治に仕掛けられた罠にはまり込んでしまった。現状の中でのみ、自己の理論の有効性を問い、現状にあわせて自己の理論

を作り変えていく、現実政治家へと、自らの姿を変えていったのである。

国際主義の立場から、クルチツキは、ロシア帝国の民主化に関する最小限綱領を、ポーランド王国の社会主義運動にもたらしめた。しかし、彼自身は、この国際主義の伝統をひく SDKP ではなく、PPS にくみし、その思想は、逆に、その核心的部分において、SDKP (後には SDK-PL) に継承され、PPS には最後まで受け入れられなかった。この皮肉な、錯綜した現象にもかかわらず、彼が幾つかの選択肢から憲法・自治の要求を取り出して最小限綱領としたことは、それが後に、王国の社会主義運動史上におけるひとつの伝統と化したことを考えると、やはりクルチツキの功績として数え上げるべきだろう。

だが、その一方で彼は、その心情において、愛国主義の思考様式に強い憧憬の念を抱いている。一八八〇年代の西欧滞在時の不可解な行動も、また PPS への入党も、この心情の発露と考えれば、首肯しうる。また、そうだとすれば、運動史上では功績とされる、最小限綱領の提示も、この心情と、社会主義運動の然るべき課題との間に設定されたエクレクティクな目標に他ならないという

見方もできよう。しかも、一九〇五年革命時には、彼は、
こんどはリベリズムの地平に移っていった。このよう
なクルチツキを、倫理的非難とは無縁な意味でエクレク

ティクと呼んでも、それは、決して不当なことではない
だろう。

(法政大学講師)